

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11886

研究課題名（和文）観光と社会空間の再構築に関する文化人類学的研究 長島をめぐる

研究課題名（英文）An Anthropological Study on Tourism and the Transformation of Social Space: A Case Study of Nagashima Island

研究代表者

八巻 恵子（Yamaki, Keiko）

就実大学・経営学部・教授

研究者番号：10511298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ある場所が観光地化するプロセスでステークホルダーらの合意形成がどのようなものかを明らかにするものである。主たる着眼点は、第1に、人の移動がもたらす空間の変容、第2に、公共空間である観光地の創造に伴う文化の再構築についてである。これらについて岡山県瀬戸内市長島をフィールドに、国立療養所の元ハンセン病患者らの記憶の展示を地域のストーリーにして行く合意形成について分析を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ある場所が「記憶の空間」として観光地化するにはとても時間がかかることがフィールド調査を通じて実感できた。本調査期間は世界遺産登録申請に向けた動きはほとんどなかった一方で、アートを通じた元ハンセン病患者の体験の国際的な展示イベントがあったり、語り部（現在は学芸員）はスタッフ増加とともに説明のマニュアル化が進んでいた。このような小さな変化を捉えるには継続的なフィールド調査の必要がある。高齢化した元ハンセン病患者の語りはもはやデジタル展示であるが、未来への遺産として残すべき記憶をいかに展示するか議論が続くだろう。過疎化地域の観光振興と合わせて継続的な研究が望まれる。

研究成果の概要（英文）： This study aims to clarify the process of consensus building among stakeholders in the process of transforming a place into a tourist attraction. It focuses on the transformation of space through the movement of people and the reconstruction of culture that accompanies the creation of a tourist attraction as a public space. In the field of Nagashima Island, Setouchi City, Okayama Prefecture, we attempted to analyze the formation of a consensus to make the exhibition of memories of former Hansen's disease patients at a national sanatorium into a local history.

研究分野：文化人類学

キーワード：空間の再構築 観光地化 長島 国立療養所

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、近代化を通じて大きく変容する人の移動とグローバルな文化的還流がおこる空間の研究、その一つとして観光の現象をとりあげて、公共空間であるところの観光地の創造とその空間の文化の再構築についての研究として開始した。

観光についての文化人類学研究の古典は、ゲストとホストの相互関係に着目する観光人類学(スミス、1991)であるが、近代化と国際観光ブームの中でマストツーリズムをめぐる文化変容に着目する議論からはじまった。観光行動の特性、観光地の形成、観光空間の創造、文化の商品化、ゲストとホストのイメージの対立、自然環境や世界遺産化をめぐるコンフリクトと融和など、観光をめぐる文化の研究のフレームワークを多岐にわたって提示した。ポストモダンにおいてはオルタナティブ・ツーリズムに主眼が置かれるようになり、持続可能な地域づくりのための手段としての観光振興の実践においては、文化操作や文化ブローカーについての研究も重視されるようになってきた。世界遺産とは何かというテーマにおいては、公共空間やグローバル・コモنزの議論の中でも研究が進められている。観光地を公共空間と見て論じる研究は、山下晋司などの観光人類学者が行ってきていた(山下、2014)。

グローバル化が加速すると、その国際間移動者らによる『グローバルな文化のフロー(アパデュライ、2004)』の様相も変化し、越境の空間に創造されるサービスや働き方も近代には見られない第三文化的な変容が見られるようになってきた。日本文化人類学会の学会誌『文化人類学』vol.82-2 2017にはグローバリゼーションと公共空間についての特集号が組まれた。人・組織・技術システムがその発祥地を離れて別の場所で新たな展開を見せるボーダーレスな文化的環流が起こる空間のことを、ハーヴェイは『脱領土化(deterritorialization)』と呼び、地球上の『時間と空間の圧縮』の現象であり、グローバル化とはそういった現象の一つなのだと説明した(ハーヴェイ、1989)。

このような先行研究を踏まえて、本研究者は越境空間に多様な文化的背景を持つ人々がやってきて第三文化的な空間を生成させる国際線の航空機の空間の研究、文化共同体としての企業についての研究、対人サービスやホスピタリティといった定量化できない価値が生成する場面についての研究を行ってきた(八巻、2013他)。文化人類学と経営学とのコラボレーション研究に経営人類学というアプローチがある(中牧&日置、1997他)。観光産業だけではなく、関連産業を含む文化共同体についての研究対象として、フィールドを考察しようと考えた。

空間と場所(Space and Place)の研究は人文地理学が得意とするところであるが、イーフォー・トゥアンは、人は情緒と場所を結びつけて空間を経験するという(トゥアン、1993)。歴史的な場所というのは、人々が代々その場所についてのイメージを保持することによって成立するという。文献、建築物、祝祭、モニュメントなどに豊かな記憶や神話が付与されるから、場所に対する人の認識が変容し、その場所は特定の感情を抱く場所になるという。

また地理的な場所と文化空間の分離について、ギデンスは『脱 - 埋め込み(disembedding)』という概念で説明している。

それらの先行研究を踏まえて、本研究のフィールドとして岡山県瀬戸内市の長島を取り上げた。大学から40kmの距離であり、当初はダークツーリズム研究者の紹介で、その後も何度か訪問したことがあり、入所者の講演や園長、学芸員から話を聴き、島内ツアーに参加する機会もあった。学生を何度か引率した際に、ハンセン病患者の隔離政策や国立療養所のことを知らない人があまりに多く、これからの長島がどのように残されていくべきなのか

については園内で議論が始まっており、ステークホルダーたちの話を聴いて、社会的も非常に重要な課題であることに気づかされた。

全国で13箇所残っている国立療養所には高齢者となった元ハンセン病患者が今も生活をしている。同時に、資料館や歴史館などの展示場が隣接している園は多い。これらの歴史と人々の記憶についてのフィールドミュージアムの可能性を模索する活動としては、長島愛生園が世界遺産登録を目指す活動を始めたところであった。島もその周辺も過疎化が進んでいて外部からの開発がなかったことから、建物の残存率が高く、これらを記憶の装置として活用したフィールドミュージアムとしては、すでにスタディツアーが始まっていた。

2．研究の目的

本研究は、ある場所が観光地化するプロセスでステークホルダーらの合意形成のダイナミズムを明らかにするものである。主たる着眼点は、第1に、人の移動がもたらす空間の変容、第2に、公共空間である観光地の創造に伴う文化の再構築についてである。これらについて岡山県瀬戸内市長島をフィールドに、国立療養所の元ハンセン病患者らの記憶の展示を地域のストーリーにして行く合意形成について分析を試みた。

3．研究の方法

フィールド調査は岡山県瀬戸内市長島の歴史館の資料展示を含む国立療養所のツアーの参与観察を中心に、瀬戸内海の3箇所の国立療養所が進めている世界遺産登録申請の活動と、活動に加わらない全国10箇所の国立療養所の資料館展示のフィールドワーク、各国立療養所の周辺地域フィールドワーク、園や療養所で働く人たち、ボランティアスタッフへのインタビュー、各園が実施するイベントの参加などを通じて行った。裁判にかかわった法律家、政治家、観光庁関係者、世界遺産登録にかかわる関係者、などからも話を聴くことができた。元ハンセン病患者は高齢化していてもはや直接会う機会はない。彼らの「共生き」の記憶がどのように代弁されるのか、ツアーガイドや展示施設のフィールドワークを中心に、人々の記憶の場所として長島がヘリテージ化していく変遷を追った。

4．研究成果

ある場所が「記憶の空間」として観光地するにはとても時間がかかることがフィールド調査を通じて実感できた。本調査期間は世界遺産登録申請に向けた動きはほとんどなかった。ステークホルダー間の利害関係は地域によって差があるが、いずれも大変に複雑であるために、積極的に語る人は少なく、現状維持傾向にある。そのような中でも、アートを通じた元ハンセン病患者の体験の国際的な展示イベントがあったり、語り部（現在は学芸員）はスタッフ増加し、ガイドのマニュアル化が進んでいた。ツアーのフィールドワークでは、コロナ禍後にはじめて、「また来てください」という言葉を聞くことがあった一方で、展示に対して暴言と批判を吐きつづける参加者を見ることもあった。このようなとても小さな変化を捉えながら長期に追いかけていく継続的なフィールド調査の必要が、今後もあると考える。

高齢化した元ハンセン病患者の語りはもはやデジタル展示でしか情報がないが、未来への遺産として残すべき記憶をいかに展示するかについては、ステークホルダー間の議論は続く。過疎化地域の観光振興と合わせての継続的な研究が望まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

〔図書〕 計7件

1. 著者名 八巻恵子（共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東方出版	5. 総ページ数 204
3. 書名 テキスト経営人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井出 明 (Ide Akira) (80341585)	金沢大学・GS教育系・教授 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Commision on Enterprise Anthropology, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences	開催年 2018年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------